The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>監修並木誠士『よくわかる日本の伝統文様名品で楽しむ文様の文化』
Author(s)	羽生, 清
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 194-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

監修　並木誠士
『よくわかる日本の伝統文様　名品で楽しむ文様の文化』
東京美術　2006年　162ページ

羽生　清／京都造形芸術大学

並木誠士会員が監修して『よくわかる日本の伝統文様』をまとめられた。前に御自身で「図書紹介」を書いておられるが，自編著ということで，本書の面白さや意義について充分に語られていない。これまで伝統文様に興味を抱いてきた私は，是非，考えておきたい。

本書は副題に「名品で楽しむ文様の文化」とある。文様は文化である。そして，それは楽しむものなのである。古来，我国の人々は文様を愛し，さまざまな染織品や器物のうえに施してきた。本書で語られているように，我国では絵画と文様の区別が定かではない。そのどちらも人生を豊かにするものとして生活空間のなかへ大らかに取り込まれてきた。美術史という学問が移入され，私たちは受容に努力した。それは，自らを相対化するうえで貴重な体験であった。しかし，そのような物差しで計ることで抜け落ちてしまう大切なものの一つが伝統文様ではなかったか。

日本の文様は数多い。島国日本に流れ着いた文様も昔この国に生まれたかのように馴染んでいる。そして，時の流れのなかで形を変えた。森羅万象に及ぶモチーフも多彩である。このような文様の全体を捉えることは，まことに難しい。要するに分かりにくいのである。しかし，本書は分かりやすい。

一頁あるいは見開きで，読み物のように完結して次へ進む。しかも年代ごとに分けてあるから読みやすい。編者は，政治の区分である時代による分類は，編者の意図によるものではないと前述の「図書紹介」で語られている。しかし，何かを用意して分けなければ分からない。分りやすい分け方として，時代区分に代わるものがあるだろうか。これまでの書物が羅列的であったのは，時間の流れが見えなかったからではないか。慎重に時代を考える立場に立って，あえて時代に分けたことによって「よくわかる」ようになっていると思う。

複雑な文様のことである。分類をはっきりさせると，そこからはみだしてしまう問題が多い。そのような情報，技法や素材，構成，由来，変容などは「ピックアップ」という欄で多角的にまとめられている。このような工夫を通して，歌枕や謡曲，物語，茶の裂地など我国の文様が持つ多様な広がりが明らかになる。時代によって分類しても互いに絡み合って成立する文様のことである。関連する情報を手早く入手できるよう，註や参照を頁の下にまとめて検索しやすくしてある。

さて，順を追って見てゆこう。まず「はじめに」において，「普段は何気なく見過ごしている文様の面白さに気づいていただき，日本の文様と文化を，存分に味わっていただければと思う」と本書の意図が明記されている。その後，各章に入る前に，「日本の文様を知る〈表現の基本〉」が挿入されている。そこで，「連続文様」「絵画的文様」「名称と構成」「遊びの精神」という文様理解に不可欠な四つ要因を予備知識として，時代順に並べられた各章に入ってゆく。

第一章は，「東アジア文様史のなかの日本」をみてゆく飛鳥・奈良時代である。ここは，吉祥の聖獣，浄土・楽園の動植物，気象・天空に分類されている。第二章は，「文様の和様化」としてまとめられた平安・鎌倉時代で

ある。ここは，文学と文様，自然が生みだす文様，身近な動物，身近な植物，幾何学的な文様，有職文様に分類される。第三章は，「新しい気運」の室町・桃山時代である。ここは，神仏をたたえる道具，身近な器物，身近な動物，身近な植物，異国趣味の文様，武将好みの文様，大胆な文様構成に分類される。第四章は，「多様な展開」をみせる江戸時代である。ここは，文学と文様，琳派と文様，身近な器物，気象，風景・風俗，幾何学的な文様，趣向のある文様，抽象的な文様に分類されている。

美術的価値ある作品とともに文様を分析することに徹した本書によって，読者は文様が全体として持つ意味について問い続けることになる。そこから，季節や物語と密接に関わり生き方の指針ともなってきた文様の役割が見えてくるばかりか，デザイン的な観点から見直した日本美術史の可能性について考えたくなる。

日本美術の名品を選定する目が，野々村仁清「色絵吉野山文茶壺」を絵柄の部分を拡大して絵画のようにみせる。そこでコピーされようと部分になろうと魅力を持ち続けるデザインの力が実感される。ただ図版掲載については編著者の意図以上に出版社の姿勢が大きく関わる。コピーを犯罪として糾弾するのではなく，コピーによって豊かな広がりを育んできた文様の大らかさが懐かしい。教育の場で良い作品を目にすることは何より大切であるにもかかわらず，版権の問題で自由に掲載できない事情は残念だ。

版権問題を克服するため，さらに積極的には文様を分かりやすくするために，本書では多くをイラストで紹介している。イラストにすることによって，これまで気のつかなかった類比などが一目瞭然となる。たとえば，「吉祥の聖獣」のなかの「獅子」。東京国立博物館蔵の「藍地唐獅子文厚板」をイラストでみると，饕餮文と獅子文は実によく似ているといったように……。

言葉の綾と形の綾，三十一文字の歌を背景とした文様のなかに神が潜んでいるのではないかと想わす日本の感性。グローバル・スタンダードと言われるデザインの世界ではそれだけ，それぞれの地域の固有性が問われることとなる。アニメーションやフィギュアなど，日本のサブ・カルチュアが現代芸術の枠に入り込んで，何が美術で何がデザインか，何がメインでなにがサブかが揺らいでいる。これは由々しき問題というより刺激的だ。

政治の時代区分とは違う文化の区分の可能性について考えるとき，日本文様の歴史のなかに，権力者の交代ではない時代区分，女子供を含んだ生活の歴史がみえてくるのかもしれない。美術にしても文様にしても平安時代から鎌倉時代の間，院政期に面白い。西欧と出会うことによって，ダイナミックに変わった幕末明治は今日の私たちの問題とも結びついて興味が尽きない。

読者は『よくわかる日本の伝統文様』から多くを考えることができる。しかし，それぞれが考えた結果にどのような意味があるのか，やはり，編者の更なる発言が楽しみになる。編者は「図書紹介」のなかで「これを機会に文学作品というテキストが絵画化され，また，文様化されるメカニズムについて，あらためて研究してみたいと考えている」と書かれている。同時に，分担執筆者，青木美保子会員，清水愛子会員，山田由希代会員，山本純子会員，若い方々がこの仕事で確かめた素材から，日本美術とデザインの基層に触れる研究を展開されることを期待したい。